

ダニエル書 - 百八十二番

預言的な同盟と戦い：古代のセレウコスから現代の地政学まで

Jeff Pippenger

2024-04-12

第13節と第14節は、セレウコスとマケドニアのフィリッポスが同盟を形成していた歴史を指し示しており、彼らはローマの最初の代理軍であるアメリカ合衆国を象徴している。また、マケドニア（ギリシャ）は国際連合の象徴である。その初期の歴史において、北の王（セレウコス）とフィリッポス（ギリシャ）の同盟は、パニウムの戦いへと至る歴史を表しているが、二世紀後には、その町の名はパニウムからカイサリア・フィリッピへと改められた。その町の二重の名称は、セレウコスとマケドニアのフィリッポスの同盟を記念するものではなかった。

「Caesarea Philippi」という名称は、PaneasまたはPaniumとして知られた古代都市の歴史の変遷に由来する。この都市はもともと、ギリシャの神パンに捧げられた著名な泉の近くにあったことからPaneasと名づけられた。

その泉は古代において重要な宗教的な聖地であり、ヨルダン川へ流れ込んでいた。

紀元前1世紀ごろ、ヘロデ大王の治世に、その都市は大規模な改修を受け、拡張・美化された。カイサリア・フィリッピは、ヘロデ大王の息子ヘロデ・ピリポによって命名された。彼はローマ皇帝カエサル・アウグストゥスに敬意を表して都市を「カイサリア」と名づけ、さらに自らにちなみ「フィリッピ」とし、合わせて「カイサリア・フィリッピ」とした。したがって、「カイサリア・フィリッピ」という名称は、ヘロデのアウグストゥスへの敬意を示す「カイサリア」と、ヘロデ・ピリポをたたえる「フィリッピ」を組み合わせたものである。

預言的に見ると、パニウムはセレウコスとマケドニアのフィリッポスの連合、およびカエサルとヘロデ・ピリポの同盟に関連づけられる。これら二つの同盟は、セレウコスとフィリッポスによって表されるプーチンのロシアの崩壊に続いて、アメリカ合衆国と国際連合のあいだで結ばれる同盟を指し示している。またそれらは、いずれもローマの代表者であったカエサルとピリポによって表される、母である教皇権と娘であるアメリカ合衆国との同盟をも表している。これらを合わせると、アメリカ合衆国が「溝を越えてローマの権力の手を握り」、さらに「深淵を越えて心霊主義と手を結ぶ」ことを示す。第16節の日曜令の前に、この三重連合はすでに確立されている。

パニウムは、ギリシャの神パン崇拜の中心地を表している。ギリシャの神パンに捧げられた泉は、当時「地獄の門」とも呼ばれていた。そしてイエスがそこを訪れたとき、彼の「地獄の門」に関する言葉は、終わりの時に起こる、ギリシャ（グローバリズム）の政治的・宗教的属性と、背教したプロテスタントイズムとの間の闘争を示している。それは、第二節でギリシャの領域を奮い立たせた裕福な大統領によって最初に開始された戦いである。それは世界的な外的な戦いであり、同時にアメリカ合衆国内部における内的な戦いでもある。

グローバリズムの宗教は竜の宗教であり、私たちの現代においてはウォーク主義の宗教である。2020年、黙示録第十一章で特定されている底知れぬ淵から上ってくる獣が、その政治的・宗教的な力を顕わにし、地の獣の二本の角を討ち取った。その底知れぬ淵は、ほかにもさまざまなものによって表されるが、ヨルダン川に水を供給していた「パンの泉」もその一つである。

ギリシア神話において、パンは自然、荒野、そして牧歌的な音楽と結びつけられており、彼に捧げられた泉の存在は崇拝者にとって宗教的な重要性を持っていた。パン神はしばしば、ヤギの脚、角、耳を持つ姿で描かれる。パンは羊飼いと群れの神と見なされ、森や山で戯れる遊び好きでいたずら好きな神としてしばしば描かれた。ヤギの脚を持つ神としてのパンのイメージは、ギリシアが雄ヤギで表されているダニエル書第8章と合致する。ヤギは古代ギリシアで一般的な家畜であり、パンが歩き回ると信じられていた山岳地帯でしばしば見られた。この描写はパンの図像表現の顕著な特徴となり、国の通貨を含め、神を描いたギリシアの美術や文学において受け継がれた。

イエスがフィリポ・カイサリアを訪れたとき、イエスは「黄泉の門は教会に打ち勝つことはない」と明言した。イエスの問いに対してペテロが述べた言葉は、キリスト教の歴史と伝統において「キリスト教の信仰告白」として理解されてきた。

イエスがフィリポ・カイサリアの地方に来られたとき、弟子たちに尋ねて言われた。「人々は、人の子であるわたしをだれだと言っているか。」彼らは言った。「ある人たちはバプテスマのヨハネだと言い、ほかにはエリヤだと言う者もあり、また、エリミヤ、あるいは預言者の一人だと言う者もいます。」
彼は彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言うのか。」
シモン・ペテロが答えて言った。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」イエスは彼に答えて言われた。「あなたは幸いだ、ヨナの子シモン。あなたにこれを明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父である。また、わたしもあなたに言う。あなたはペテロであり、この岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の門もそれに打ち勝つことはない。そして、わたしは天の御国の鍵をあなたに与える。あなたが地上でつなぐものは何でも天においてもつながれ、あなたが地上で解くものは何でも天においても解かれる。」それからイエスは弟子たちに、自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと命じられた。マタイの福音書 16:13-20

この箇所が重要なのは、イエスの宣教活動とキリスト教神学の発展における転換点を示しているからである。ペテロがイエスをメシア、生ける神の子と告白したことは、キリスト教信仰の基盤であり、教会がその上に築かれる礎とみなされている。「この岩の上に、わたしの教会を建てる」という句は、カトリックの伝統ではペテロ自身を指すものと解釈され、イエスは教会がその上に建てられる「岩」として彼を示している。この解釈は、カトリック神学における教皇首位権と権威の根拠となっている。

プロテスタント神学では、「岩」はペテロ個人を指すのではなく、イエスがメシアであり神の子であるというペテロの信仰告白を指すと理解される。この見解では、教会の礎はペテロその人ではなく、イエスがキリストであり神の子であるという告白である。神学的解釈のいかにかわらなく、マタイ16章13-20節におけるペテロの信仰告白は、イエスがメシアであり神の子であることを強調し、教会の使命と目的を確認しているキリスト教

信仰における中心的かつ基礎的な箇所とみなされている。

前回の記事では、『The Desire of Ages』の中でホワイト姉妹が、キリストのカイサリア・フィリピ訪問に関連するいくつかの論点を指摘している箇所を紹介した。彼女が挙げる点の一つは、カイサリア・フィリピでの教訓を示すために、キリストが弟子たちをユダヤ人の影響から離れたところへ連れ出されたということである。

イエスとその弟子たちは、いまカイサリア・フィリピ付近のある町の一つに来ていた。彼らはガリラヤの境を越え、偶像崇拜が支配的な地域にいた。ここで弟子たちは、ユダヤ教の支配的影響から引き離され、異教の礼拝とより密接に接することになった。彼らの周囲には、世界の至るところに存在する迷信の諸形態が示されていた。イエスは、これらを目にすることによって、彼らが異教徒に対する自らの責任を感じるようになることを望まれた。この地域に滞在している間、イエスは民衆への教えから身を引き、弟子たちにいっそう専心しようと努められた。『各時代の希望』411

2020年7月18日、キリストは2001年9月11日の弟子たちを、ラオデキヤ的アドベンチズムの影響から引き離した。十人の乙女のたとえにおける最初の失望は、通り過ぎられようとしていた嘲る者たちの会衆から、その運動を分離させた。この真理は1844年4月19日にミラー派の歴史の中で成就し、さらに2020年7月18日に再び成就した。そしてその後、遅れの時の歴史が始まり、その歴史は、第一の天使と第三の天使の運動の双方において「真理」の印を帯びている。

最初の失望は三つの道標のうちの第一であり、その歴史は『ヨハネの黙示録』第十一章の「大地震」を象徴する1844年10月22日の大失望で締めくくられる。始まり、すなわちヘブライ文字の第一文字は失望を表し、終わりである第二十二文字もまた失望を表す。反逆を表す第十三文字は、真夜中の叫びが危機に備えた者と備えなかった者を明らかにする時に、自らの失われた状態を現す愚かな乙女たちの失望を指し示す。ヘブライ文字の二十二文字は、その歴史の中で成就する神性と人性の結合を象徴しているが、ミラー派の歴史は最初のカデシュを表し、今日の私たちの歴史は最後のカデシュを表している。

二つの線は平行しているが、一方は神の民の失敗を、もう一方は神の民の勝利を表している。十字架の直前に、イエスは弟子たちをパニウムへ連れて行かれたが、同じように、イエスは終末の弟子たちもパニウムへ導かれ、その際、マタイによる福音書第16章の歴史において「ユダヤ教」によって表されているラオデキヤ的アドベンチズムの「支配的影響」から彼らを引き離すために、一つの失望をお許しになった。同時に、イエスは弟子たちを異教とより密接に接触するところへも導かれ、それによって、現代の通信システムによって代表され、全世界を獣の刻印を受けるように導くために用いられているサタン的な力が本格的に顕れているただ中に今生きている終末の弟子たちの働きの環境をも表された。

カイサリア・ピリピの歴史は、パニウムの戦いの歴史および13節から15節の記述と一致している。キリストとその弟子たちは十字架の陰に立っており、それは終末時代の弟子たちが日曜法の陰に立つことを象徴していた。そこで、13節から15節、すなわちカイサリア・ピリピにおいて、また、今日私たちが立っている所に当たるパニウムの戦いにおいて、キリストは16節で起ころうとしていることについて弟子たちに教え始められた。

彼は、自分を待ち受けている苦難について彼らに語ろうとしていた。しかし、まず彼はひとりになり、彼の言葉を受け入れることができるよう、彼らの心が備えられるように祈った。『各時代の希望』411頁。

キリストは弟子たちに十字架のことを告げる前に、まず去られ、すなわちしばらくとどまられた。こうして、たとえ話と歴史における遅れの時、すなわち2020年7月18日から2023年7月までが示された。

彼らに加わったとき、彼は、授けようと望んでおられたことを直ちに伝えはしなかった。そうなさる前に、やがて来る試練に備えて彼らが強められるよう、彼に対する信仰を告白する機会を彼らに与えた。『各時代の希望』411頁。

2023年7月、主はその失望に関わった人々が自らの信仰を証しする機会を与え始められた。主は、エゼキエル書37章のメッセージを明らかにすることによってそうなった。それは2001年9月11日のメッセージの確証であった。それは、2001年9月11日からの封印の時期と、間もなく到来する日曜法を結び付ける一本の糸であった。このことは、2020年7月18日の失望を真理の構造の中に位置づけることによって成し遂げられた。というのも、見る意志のある者には、あらゆる改革運動にはそれぞれの特有の聖なる歴史を貫く主題があることが認められたからである。

終わりの日々にあって、第三の災いのメッセージが2001年9月11日に到来した。その後、失望をもたらす第三の災いの偽りのメッセージが宣べ伝えられたが、死に、干からびて散らばった骨となって三日半ののちに彼らを生き返らせたメッセージは、四方の風のメッセージであり、それもまた第三の災いである。

終わりの時の弟子たちは、見ようとするなら、十四万四千人の封印に関する三つの道標が各段階で同じ主題であること、そして第二段階においては、ヘブライ文字の第十三文字で表される反逆がそのメッセージを「真理」として確証したことを見て取ることができる。主が備えられた第二の証しは、先行する改革運動における最初の失望が、神の啓示された御旨に対する反逆に基づいていたという事実にあった。それが、モーセが自分の子に割礼を施さなかったことであれ、ウザがあのかの契約の箱に触れたことであれ、あるいはラザロの死に関するイエスの言葉をマルタとマリアが疑ったことであれ。最初の失望が不従順に基づいていたという事実を支持しなかった唯一の改革の路線はミラー派の改革運動であったが、その時、ミラー派の歴史にもまた、「七に属する八」という真理に基づく内的な道標が存在していたことが示された。

「八番目が七つのうちの一つでもある」という事実は、今や封印が解かれつつあるイエス・キリストの黙示の主要な要素であり、フィラデルフィアのミラー派運動からラオデキア教会への移行は、第三天使のラオデキア的運動が十四万四千人のフィラデルフィア的運動へと移行する時を示す道標であった。したがって、第一のミラー派の失望がその運動に不従順が現れることなく経験されたという事実は、終わりの日における同じ道標に対する対照を与えた。そこでは第三天使のラオデキア的運動が不従順を犯して失望を生み、そのことによってミラー派の道標と一致し、そして十四万四千人の運動が「八番目であり、七つのうちの一つである」ことを見いだすための論理を生み出すのである。

2023年7月に、主は「荒野で叫ぶ者の声」を起こして、終末の民を日曜法の危機に備えさせられた。そして、祈りのうちにしばらくとどまられたのちに弟子たちのもとへ戻られると、彼らに自らの信仰を言い表す機会をお与えになった。キリストの時代において、そのメッセージは主の洗礼であり、そこでイエスがイエス・キリストとなられた。その道しるべは2001年9月11日に対応しており、主の弟子たちは、人々がどう考えているかを問われ、次いで弟子たち自身がキリストについてどう考えるかを問われた。

彼らに加わったとき、彼は自分が授けようとしていたことをすぐに告げはしなかった。そうする前に、やがて来る試練に備えて強められるよう、彼に対する信仰を告白する機会を彼らに与えた。彼は尋ねた。「人々は、人の子である私を誰だと言っているのか。」

悲しいことに、弟子たちは、イスラエルが自らのメシアを認め損なったことを認めざるをえなかった。実際、彼の奇跡を見たとき、彼をダビデの子だと宣言した者もいた。ベツサイダで食べ物を与えられた群衆は、彼をイスラエルの王として立てたいと望んだ。多くの人々は彼を預言者として受け入れる用意はできていたが、彼がメシアであるとは信じなかった。時代の望み、411。

アドベンチストの大多数は、2001年9月11日の第三のわざわいを信じなかった。彼らは、その運動の中で提示されていた預言の言葉が示すいくつかの奇跡は信じ、2001年9月11日のメッセージに真理の要素があると理解した者もいたが、2001年9月11日に関する主張を真には信じなかった。

2001年9月11日の主張は、1840年8月11日の主張によって予表されていた。そしてその主張は、1840年8月11日の成就について論評する際にホワイト姉妹によって表明された。彼女は次のように述べた：

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

1840年8月11日に確認されたのは、Millerの預言的見解が正確であったということであり、2001年9月11日に関する主張は、Future for Americaの預言的見解が正確であることの確認である。2023年7月の悔い改めない群衆は、キリストが設計し、Future for Americaに委ねられた方法論こそが実は後の雨の方法論であるという前提を受け入れることができず、また受け入れようとしなかった。しかしそのとき、キリストは、群衆ではなく彼らがどう考えているのかを弟子たちに尋ねた。

イエスは次に、弟子たち自身に関する第二の問いをなされた。「では、あなたがたはわたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「あなたはキリスト、生ける神の御子です。」

ペテロは初めから、イエスこそメシアであると信じていた。そして、バプテスマのヨハネの宣教によって確信に至り、キリストを受け入れていた多くの人々も、彼が投獄されて処刑されると、ヨハネの使命について疑い始め、長く待ち望んできたメシアがイエスであることにも疑念を抱くようになった。イエスがダビデの王座に就かれることを熱心に期待していた多くの弟子たちは、彼にその意図がないと悟ると、彼のもとを離れた。しかし、ペテロとその仲間たちは、その忠誠を翻すことはなかった。昨日は称賛し、今日は非難するような移り気な人々のふるまいも、救い主の真の弟子の信仰を打ち砕くことはなかった。ペテロは「あなたはキリスト、生ける神の子です」と宣言した。彼は主に王としての栄誉が授けられるのを待たず、へりくだりの中におられる主を受け入れた。

ペテロは十二人を代表して信仰を告白した。だが弟子たちはなお、キリストの使命を理解するにはほど遠かった。祭司や指導者たちの反対と曲解は、彼らをキリストから引き離すことはできなかったが、それでも大きな困惑を引き起こした。彼らは自分たちの進むべき道を明確に見てはいなかった。幼いころからの訓練の影響、ラビたちの教え、伝統の力が、なお真理への視界を遮っていた。時おりイエスから尊い光が彼らに差し込んだが、しばしば彼らは影の中を手探りする者のようであった。だがこの日、信仰の大いなる試練に直面する前に、聖霊が力をもって彼らの上にとどまった。しばしの間、彼らの目は「見えるもの」から離され、「見えないもの」へと向けられた（コリント人への第二の手紙

4:18）。人としての姿の覆いの下に、彼らは神の子の栄光を見た。

イエスはペテロに答えて言われた。「バル・ヨナ・シモン、あなたは幸いです。これをあなたに明らかにしたのは、人間ではなく、天におられるわたしの父です。」『各時代の希望』412ページ。

キリストが神の子であると告白したペテロの宣言は、その歴史における試金石となる問いに真正面から応えるものであった。神の預言の言葉によって示されていたとおり、メシアが現れる時が来ており、その真理を受け入れる者だけが、ペテロの言葉によって代表される者たちに加えられるのであった。ペテロは、2001年9月11日に確立されたメッセージを受け入れ、イエスが神の子であると告白する者たちを表している。「ペテロは十二人の信仰を言い表した」のであり、彼が代表していた十二人は、十四万四千人を指していた。このため、キリストはその箇所では彼の名をシモン・バルヨナからペテロへと変えられた。

「シモン」は「聞く者」を意味し、「バル」は「～の子」を意味し、「ヨナ」は「鳩」を意味する。シモンは、鳩の知らせを聞いた人々を象徴していた。鳩は、イエスが力によって油注がれてキリストとなられたときになされた洗礼に関わる真理を表しており、それは、鳩の姿で聖霊が下ったことによって象徴的に示された。

改革の流れは互いに並行しており、ヨハネは1840年8月11日に小さな巻物を食べたミラー派を表している。エレミヤはその出来事と一致しており、彼が小さな巻物を食べたとき、神の名によって呼ばれた。

私はあなたの御言葉を見だし、それを食べました。あなたの御言葉は私の心の喜びと楽しみとなりました。私はあなたの名によって呼ばれているからです。万軍の主なる

神よ. エレミヤ書 15:16.

主がアブラムと契約を結ばれたとき、主は彼の名をアブラハムに改められた。これはサライヤヤコブに対してなされたのと同様である。名が変えられることは契約関係を象徴しており、神のしるしが下る道標において、神の民はそのメッセージを食べ、契約に入り、その名を変えられる。キリストの時代の弟子たちの代表として、シモン・バルヨナは「鳩」のメッセージを「聞いた」者たちを代表していた。

彼が、その道標においてイエスがキリストとなり、神の子であること、そしてそれが意味するすべてを自分が認識していると証したとき、キリストは彼の名をペテロに変えた。彼は、その時代のキリストの契約の民が受け入れたメッセージを表明しており、そうすることで終わりの日の十四万四千人をも予表した。

英語のアルファベットでは、「P」は16番目の文字、「E」は5番目、「T」は20番目で、「E」が繰り返され、その名は18番目の文字である「R」で終わる。16「掛ける」5「掛ける」20「掛ける」5「掛ける」18は14万4千に等しい。その素晴らしい言語学者はヘブライ語でピーターに語りかけ、新約聖書はギリシア語で書かれ、キング・ジェームズ版の翻訳者たちは新約聖書を英語に翻訳した。

言語の相違という三つの段階を経ているにもかかわらず、神の御子であり、驚くべき言語家にして、また驚くべき数を数える方であるキリストは、マタイの福音書16章に、十四万四千人の封印に関する一つの例証を示され、それをパニウムの戦いとカイサリア・ピリピへのご自身の訪問と符合させられた。主は、言語と数に対するご支配をもってこれを行われた。というのも、主はパルモニ（驚くべき数を数える方）であり、またことば（驚くべき言語家）でもあるからである。

次の記事でこの研究を続けます。

およそ二千年前、天において、神の御座から「見よ、わたしは来ます」という神秘的な意味をもつ声が聞こえた。「いけにえと供え物をあなたは望まれず、しかしあなたはわたしのためにからだを備えてくださった……見よ、わたしは来ます（巻物の書にわたしについて書かれている）、神よ、あなたのみこころを行うために。」へブル人への手紙 10:5-7。これらのことばのうちに、永遠の昔から隠されていた計画の成就が告げられている。キリストはこの世を訪れ、受肉されようとしておられた。彼は言われる、「あなたはわたしのためにからだを備えてくださった」。もしも、世界が存在する前に父とともに持っておられたその栄光のままで現れておられたなら、私たちはその御臨在の光に耐えられなかったであろう。私たちがそれを見ても滅びることのないために、その栄光の現れは覆われた。彼の神性は人性によって覆い隠され、見えない栄光は見える人間の姿のうちにあった。

この偉大な目的は、型と象徴によって予表されてきた。キリストがモーセに現れた燃える柴は、神を啓示した。神を表すために選ばれた象徴は、見た目には何の魅力もない卑しい低木であった。だがそこにこそ無限なるお方が宿っていた。あわれみ深い神は、モーセがそれを見てなお生きることができるよう、最もへりくだった型のうちにご自身の栄光をおおい隠された。同じように、昼の雲の柱と夜の火の柱のうちに、神はイスラエルと交わり、人々にご自分の御心を明らかにし、彼らに恵みを授けられた。

神の栄光は和らげられ、その威厳は覆いで包まれ、有限な人間の弱い目でもそれを仰ぎ見ることができるようにされた。こうしてキリストも、「私たちの卑しめのため」(ピリピ 3:21, R. V.)において、「人間と同じ姿で」来られるはずであった。世の人々の目には、彼を慕わせるような美しさは認められなかった。それでも彼は受肉した神、天と地の光であった。その栄光は覆われ、その偉大さと威厳は隠された。悲しみ、誘惑にさらされている人々に近づくためであった。

「神はイスラエルのためにモーセに命じて言われた、『彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。そうすれば、わたしは彼らのただ中に住むであろう』(出エジプト記 25章8節)。そして主は聖所に、民のただ中に住まわれた。彼らが荒れ野で疲れ果てながらさまよった間じゅう、その臨在のしるしは彼らとともにあった。同じようにキリストは、私たち人間の宿営のただ中にご自分の幕屋を設けられた。人間の天幕のかたわらにご自分の天幕を張られ、私たちの間に住み、その神的な性質と生涯に私たちを親しませるためであった。『ことばは肉となり、私たちの間に幕屋を張られた(私たちはその栄光を見た。それは父からの独り子としての栄光であった)、恵みとまことに満ちていた。』ヨハネ1章14節, R. V., margin.

イエスが私たちと共に住まわれたので、神が私たちの試練をよくご存じで、私たちの悲しみに同情してくださることを私たちは知っています。アダムのすべての子らは、私たちの創造主が罪人の友であることを理解することができます。というのも、救い主の地上での生涯において示された、恵みのあらゆる教理、喜びのあらゆる約束、愛のあらゆる行い、神のあらゆる魅力のうちに、私たちは「神は私たちと共におられる」ことを見いだすからです。

サタンは、神の愛の律法を、利己心の律法であるかのように見せかける。彼は、私たちがその戒めに従うことは不可能だと主張する。私たちの最初の父母の墮落と、その結果もたらされたすべての惨禍を、彼は創造主のせいにし、人々に神を罪と苦しみと死の元凶であるかのように思わせる。イエスはこの欺きを明らかにされた。私たちの一人として、従順の模範を示されたのである。そのために彼は私たちの性質を身に負い、私たちの経験を通られた。「あらゆることにおいて、彼は兄弟たちと同じようにされる必要があった。」ヘブル人への手紙 2:17. もし私たちが、イエスが通られなかった何かを負わねばならないのなら、その点でサタンは、神の力は私たちにとって不十分だと示すことができたであろう。ゆえにイエスは「すべての点で、私たちと同じように試みに会われた。」ヘブル人への手紙 4:15. 彼は、私たちがさらされるあらゆる試練に耐え忍ばれた。そしてご自身のために、私たちに自由に与えられている以上の力を用いられることはなかった。人として、彼は誘惑に向き合い、神から与えられた力によってそれに打ち勝たれた。彼は言われる、「わが神よ、わたしは御心を行うことを喜びます。まことに、あなたの律法はわたしの心のうちにあります。」詩編 40:8. 彼は善を行い、サタンに苦しめられているすべての者をいやしつつ歩まれながら、神の律法の性格と神に仕えることの本質を人々にはっきり示された。彼の生涯は、私たちもまた神の律法に従うことが可能であることを証している。

その人性によってキリストは人類に触れ、その神性によって神の御座をしっかりととらえておられる。人の子として、従順の模範を私たちに示し、神の子として、従う力を与えてくださる。ホレブ山の柴の中からモーセに語り、「わたしは『わたしはある

』である……こうしてイスラエルの子らに言いなさい、『わたしはある』という方が、わたしをあなたがたのもとへ遣わされた、と』と言われたのはキリストであった。出エジプト記 3:14. これはイスラエルの解放の保証であった。だから、彼が「人間の姿で」来られたとき、ご自分を『わたしはある』であると宣言された。ベツレヘムの幼子、柔和でへりくだった救い主は、「肉において現れた」神である。テモテ第一 3:16. そして私たちに言われる。「わたしは良い羊飼いだ。」「わたしは生けるパンである。」「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」「天においても地においても、一切の権威がわたしに与えられている。」ヨハネ 10:11;6:51;14:6;マタイ 28:18. 『わたしはある』は、すべての約束の保証である。『わたしはある』. 恐れるな。「神が私たちと共におられる」ことこそ、私たちの罪からの解放の保証であり、天の律法に従う力の確証である。The Desire of Ages, 23, 24.